

## ⑤ 鶴見川流域ネットワークワーキング(TRN)

園部弘明・草野重芳・岸 由二

鶴見川流域での「水と緑」に関わる活動をして

いる市民グループが、都、県、町田・川崎・横浜三市の枠を越えて連携し合い、鶴見川を軸とした「鶴見川流域ネットワークワーキングフェスティバル」(リレー川祭り)を昨年五月から行ってきた。一年間のイベントを通じて、源流から下流部までの交流を進める中で、シンポジウム・フォーラムや川歩き、川原でのキャンプなど、楽しんでいっているうちに流域の情報交換や人とのつながりができてしまうような場づくりができた。建設省とTRNが共催で流域住民一六〇万人に募って開催した、「鶴見川いきいきセミナー」では、川から見たまちづくりの発想もたくさん出されてきている。短期間の活動の中から、横浜地域だけでも全体の三分の一(約一四二ヘクタール)、町田・川崎市を合すると横浜市全体の二分の一ほどの流域での市民団体の交流、さらには行政機関との交流成果を生み出すことができたが、これには、ヒントがあった。それが、

参加型ネットワークワーキングである。

### 一 参加型ネットワークワーキング

川づくりは既に、これまでの直線化されコンクリートで固められた治水(安全性)一辺倒の河川整備から、「費用が増えたとしても水辺の美しさや潤い、豊かな生物の生息などに配慮すべき」などの要望が市民権を得て、「多自然型川づくり」が実地に移され、「水と緑豊かな生活環境の創造」が求められる時代を迎えている。

しかし、河川整備の速度と市民意識の合意形成の速度にズレが生じたり、流域のまちづくりと連携がとれないと、せっかく整備されたのに利用されなかったり、過度な安全対策が求められて柵だらけになってしまう。コンクリートの垂直護岸が階段状に変わっただけで親水施設として市民に歓迎された時代もあったが、水に触れられるようになれば生き物をつつけ自然を回

- 一 参加型ネットワークワーキング
- 二 情報交流も参加型で
- 三 生活から発想し、地球規模で考え、流域で行動する
- 四 市民・行政ネットワーク同士の交流

復したいと考えるようになり、川原にタイトルを張ったりするのはつくり過ぎと言われてしまう。そこで日常的な利用やイベントを通して川とのつき合い方を取り戻しながら、これと連動したかたちで川や流域のまちづくりを考えていけるようなソフトな仕掛けが必要になってくる。

こうして始まったネットワークワーキングの参加グループは、身近な谷戸の自然保護、川辺の街の再開発、川原での遊び・遊び場づくり、流域の歴史調査、都市農業の支援など、さまざまなテーマで活動しているヒトたちが集まった。こういった活動のひとつひとつは、それぞれ固有の目的をもっているがゆえに、他の運動との間に摩擦が起きることもある。例えば、自然保護と川原の遊び場づくりは必ずしも、同じ目的に向かっているとは言えない。ザリガニとこどもは、昔から宿敵同士なのだ。

また、グループ発足時からの活動が実績を重ねれば重ねる程、活動してきたヒトたちは、知

識を豊かにして問題意識もより高くなっていく。だから、こんなグループに新しく参加したいという人には、かなりの勇気がないと飛び込みづらくなってしまう。

「この指とまれ方式」では、楽しむだけのイベント参加もできるし、自分なりの問題意識から新しい活動を始めることも容易である。

台所の排水が、川へ流れ出ていることを知らなかった主婦は、廃油石けんづくりから源流域での活動を知り、源流コーヒーをごちそうになり、源流の泉をたずねてその自然のすばらしさを発見した。自分の住む中流域からも、この活動を支援しようと「中流応援団」を結成して、自然保護、水質保全、治水対策などの勉強会も始めた。「何も分からないおばさん」という立場を武器にして「チスイ」って何のこと？教えてくれなきゃワカランナイと、国のお役人も、地域の学者先生もみんな応援団員に引きずり込んでしまっている。

既存のグループも、今までの活動の視点を他の地域とのつながりや新しい情報によってより拡がりのあるものになってきた。

自分たちの食べるものは、安全なものを、そのためには、身近なところの地元農家を応援して、地元野菜の産直からと、契約栽培を始めていた「みどりの会」でも、流域の都市部に残る

農地としては、最下流部にある獅子ヶ谷から中・上流部へと、生産者グループとのつながりを拡げることができた。そして、自分たちの活動が流域の保水機能や、川沿いの田園風景の保全にも役立っていることを知って、新たな視点で都市農業の支援をPRできたと喜んでいる。

「貴方たちは、専門家ではないから、活動しても成果は期待できない」というタテ割り社会の評価の仕方が、市民グループの中にも波及して、自分たちの活動の専門化を急ぐあまり、その範囲を狭めてしまうグループもあると思うが、こんなとき、応援団のスタンスは、元気になるための重要なエネルギー源になっている。

ひとつの目的に向かって全体が活動する組織ではなく、それぞれが違った価値観や目的をもったグループであることを認め合った上で、お互いに評価し合い、協力できる範囲の中で協力するというのが、参加型ネットワークキング（この指とまれ方式）の原理である。

## 二——情報交流も参加型——

市民団体の最も重要な活動のひとつは、自分たちの活動を、一般の人に知らせる情報づくりとその媒体づくりである。それぞれのユニークな活動は、グループの内・外へ向けて、情報発

信することで、直接活動に参加している人の結束だけでなく、かわそうじをしたり、廃油石けんづくりをしているのは、生活に余裕があるからとか、他人のために何かしてあげるという自己満足なんじゃないかという誤解をなくし、地域や環境のための活動が、結局は自分たちのための行動なんだということを理解してもらおうことで、活動を外側から見守ってくれている市民の応援を得ることができる。しかし、独自の広報活動では、費用がかかるわりに外側への効果は、あまり期待できないので、ニュースづくりは、各グループとも最大の悩みのタネでもある。また、自主・自立の活動をそのままみんなに伝えたいと思えば、他のグループの媒体には頼りづらい。

そこでTRNでは、流域の各グループの外へのPRを、ゆるやかにひとつにまとめることで情報発信と情報収集がいっしょにできるよう情報交流の場づくりを行った。具体的には、各グループの一年間の活動を紹介したつるみ川マップ&カレンダー、TRNネットニュースづくりなどだが、それ以外にも、各グループ及び個人がTRNに登録することで、自分たちのPRや活動予定などが、他の参加グループのニュースなどにも載せてもらえる。特徴的な媒体としては、下流部を中心にして、流域十萬世帯へ毎月新聞

折り込みされているミニコミ紙230クラブ新聞、水辺に関わる活動情報だけを全国へ向けて発信しているよこはま・かわを考える会ニュース（毎月一、〇〇〇部）などがある。

ローラー作戦と一本づり作戦が同時にできる仕掛けになっている。もちろん、一方的に情報だけ欲しい人も、PRだけしたいグループも、参加自由である。

そして、これらの情報交流は全てタダである。どこかで元手はかかっているはずだが、今のところ無料である。各自が協力できる範囲の中で協力し合っているからで、これも、参加型ネットワークのなせる技かな。

### 三——生活から発想し、地球規模で考え、流域で行動する

今、鶴見川で始まった流域ネットワークキングの動きは、水系・流域を自分たちの生活エリアと考えるヒトたちの地域まちづくりである。知識人や専門家のための集まりではなく、最も身近な日常の生活の中から発想できる、とつき易いものの方と、遊び感覚で楽しみながら行動できる場づくりである。

参加グループの中には、水性動物に詳しい大

行政のプロを自認するものもいる。しかし、全員が流域人であり、各自の生活の場からの運動になっている。

都市住民にとっての生活は、自分たちの認識できないほど、はるか彼方にまで及んでいる。台所の水、毎日食べている食料、そのほとんど全てが遠方からの調達でまかなわれ、その廃棄物もまた、思いもかけない広範囲に運ばれている。これを容認する社会構造の延長線上には、第三世界の深刻・悲惨な姿が見える。目の前のトーストと、朝のニュースのODAを結びつけて食べている人が何人いるだろうか。

川は、常にそんな流域の生活を写すカガミである。その流れをみているだけで生活の中にかかわっている多くのものがみえてくる。普通、大きな川の流れは、降水時以外でも雨水によってつくられているが、鶴見川は、その大半が下水処理水である。つまり、鶴見川の流れは、相模川水系などの水道水と輸入食料のなれの果て（ウンコ）によってつくられているのだ。食料といっしょにくっついて海外からやって来た農薬もまた川を流れていく。その流れは海にそそがれ、蒸気となって雲をつくり、雨となって山に降り、また鶴見川に戻ってくる。水は高いところから低いところへ流れ、その循環は永遠に繰り返される。だから、水以外のイライナイものは

水辺にほとんど蓄積されていく。

鶴見川の流れをキレイにするには、この悪循環を変えなくては。といって明日から無農薬の流域野菜と井戸水だけで、流域住民全員が生活しろといってもムリなのは、自明の理である。自分たちの生活のすべてに責任を果たさなければ、他に向かってもの言うことができないうら、市民運動に参加する人なんていなくなってしまうであろう。しかし、自分自身が環境の循環の一部であることを知り、自分の生活を見直すところから始めなければ、この流れを変えることはできない。そして、地域社会においても、市民生活においても、現在の地球環境ブームのように、川への負担を減らすような生活パターンが、身近なところで社会的コンセンサスをつくっていくければ、川は、自然の力で本来の姿に戻っていくはずである。

現在、地球環境保全のための国の対策が論議されている。事のよし悪しは別としても、国レベルの話は、どうも身近には感じられない。反対に、狭い地域の中で、コミュニティの押し売りのように、清掃活動を強いられても反発してしまふ。

鶴見川の流域ネットワークキングは、この中間をいっているのではないか。

上流で水を汚せば、その流れは下流域の人々

の心まで汚してしまう。一方、上流域の農地や緑地がなくなれば、水源は減り、ちよつとの雨でも下流の街は洪水の危機にさらされることになる。狭い地域での要求するだけの活動を越えて、水道の水源地を含めた流域をひとつの循環する環境としてとらえた連帯を、誰にでもわかりやすく身近なところからつくろうとしている。

一人で他人の家の庭先を清掃していたら、「何だこいつ」と思われてしまうが、川そうじをしていても怒る人はいない。日頃、川の中のゴミを何とかできないかと思っていた人が、「ごころうさま」と声をかけてくれる。どこのだれかは分からなくても、いつのまにか、川沿いの田園景観が変わりつつあること、みんなの環境って何だろうと、話し始めてしまう。「じゃ今度は、いっしょに上流まで歩いてみましょう」こんな風に気楽に、ゆるやかにつながりを始められる場がつけられたら、と言うのが鶴見川のネットワークキングである。

#### 四——市民・行政ネットワーク同士の交流

ネットワークキングの活動は、市民グループだけのものではない。一般の流域市民、流域企業、

河川管理者、自治体をもまき込んで、交流している。とりわけ、行政との関わりでは、建設省と流域自治体（東京都・神奈川県・町田市・川崎市・横浜市）が先にネットワークしている。「鶴見川流域総合治水対策協議会」を元気づけるための応援協力や区役所などで主催するイベントへの応援参加を行っている。市民グループのネットワークは、流域をひとつの地域と考え、行政のナワバリを越えて行動しているが、これに対応してくれる窓口は今のところない。

行政同士の連絡の場としては、水質保全連絡会等があるが、その中でも、対策協議会は、流域を単位に恒常的に運営されている唯一の行政組織であり、流域市民の連携に対して、活動の支援も得ている。この対策協議会が主催して毎年行われているイベントにもTRNは開催協力をしているが、今年は、流域市民まちづくりワークショップともいべき「鶴見川いきいきセミナー」の発足に一役かわせてもらった。都市整備と自然環境の調和を複合的な視野でみた総合治水の考え方や、流域の歴史などの学習に始まって、川歩きや水質検査を体験し、みんなで持ちよった情報を流域地図に書き込んだり、行政への提案づくりを行った。参加者は、全流域から

の公募で集まり、市民グループの口コミ的拡がりとは違ったネットワークができた。地質学の教授OBから女子大生まで、さまざまの人が参加して、源流部から下流部に至る各流域から、源流自然公園、流域情報センター、リバーポート計画、緑化クリーンアップ推進計画などの提案があった。

このセミナーの発表を兼ねた交流フォーラムでは、主催事務局である建設省の担当者、参加市民のパワフルさと川づくりを含めたまちづくりに対する関心の高さに元気づき、参加者も学習の楽しみと新しい人のつながりを喜んでくれた。また、コーディネーター役の宮村忠教授から「流域交流サロン」の提案もあり、今後は、イベントなどのソフトな場づくりだけでなく、みんなが集まれる空間としての場づくりも検討されることになった。そこへ行けば、いつも流域の誰かが、昨日、見聞した情報や思いといったことを話したくて待っている、市民・行政・企業etc. 誰にでも、いつでも開かれている、そんなサロンができれば、鶴見川のまちづくりは、もっと楽しくできる。

〈園部〓都市計画局都市デザイン室〉

## その1・鶴見川を楽しくする会

### 一——会の誕生

今年の二月十八日で「鶴見川を楽しくする会」も満五才になります。あの夜のごときは、今でもよくおぼえています。知人に誘われるまま東京・新橋のネットワーク・サロン「集」に出かけ、川の交流会に初参加したときのこと。男女二十五人ほど集まって、そこは、建設省や横浜市の河川関係のお役人、川のコンサルタントや学者、ナチュラリスト、そして私のような鶴見川沿川企業の会社員も混じっての異業種交流会でした。社会的な地位、立場、職業などは様々でしたが、皆に共通点がありました。それは、子供の頃、思いきり川で遊ばせてもらった原体験と鶴見川はじめ都市河川の再生をやるうというロマンチストの夢のようなものでした。

京浜地帯の重化学工業化と沿川都市化の犠牲となって、ドブ川化し、殺風景な放水路のようになってしまった鶴見川をきれいな川に再生・創造したい。泳いだり、釣った魚が食べられるような川にしたい。ところで、その妙案は？——というのが当夜のテーマで、活発な議論になりました。

素人の怖さ知らず。私も、「川は、これから

確実にやって来る高齢化社会のインフラ。言ってみれば、ボケ防止の散策道、車が入ってこない安心地帯、思索空間、身近な河川公園、ミニ農園、コミュニティ広場などとして活用したい」と、五十歳を目前にして、つい熱が入っていました。

最近でこそ、水辺のアメニティとか環境重視の思想も普及して、土手に菜の花やコスモスを植えようとか、多自然型河川工法を実験してみようとか、当たり前のように話したり聞いたりしていますが、当時は川の中の草一本いじるのにも河川管理者の許可が要するというような常識が支配していた時代のことでしたから、あの夜の交流会はかなりラディカルでした。

さて、方法論は？、という段階になって、それは、これから我々がつくる会の研究テーマ、という結論になって、その場で当会が誕生する運びになりました。

#### (1) 会の目的

① 鶴見川の再生と創造、② 鶴見川を活かしたまちづくり、③ その方法論。

#### (2) 会の名称

「守る会」や「良くする会」の提案もありましたが、「楽しく川で遊んだ原体験」を会活動の原点にする趣旨で、「鶴見川を楽しくする会」と決まりました。

(3) 次に、会の会長、副会長の選任となって、驚きました。まさに晴天の霹靂。初参加のしかも素人の私に白羽の矢が立ったのですから。推薦者に後で聞くと、「あんなが、一番熱心そうだったから」という。それだけのことで、ドンキホーテの私は、初代会長をやらされる羽目になったのです。引き受けはしたものの、タテ社会（会社）をはみ出して、地域コミュニティとかネットワーク社会という新しいヨコ型市民社会の実験に乗り出すからには、タテ社会のシンボル・「長」の付く肩書は願ひ下げにすべきだという考えがありました。この五年間、名実ともに会の「世話人」としてやってきました。

### 二——やっているうちにわかる

#### ——継続は力なり

五年前の当会誕生の頃、私は、鶴見川のほとりに本社を置くエンジニアリング会社の総務を担当しておりましたから、地域社会との交際は仕事の一環でした。また、その一年程前から、社長に提案して社内有志で始めた「環境土木事業部」（地盤改良やヘドロの資源化技術で水辺の再生・創造に取り組むエンジニアリング事業）の運営にも参画しておりましたので、会社にあまり気兼ねすることなく、当会の世話人活動が

できる立場にありました。そのうち、環境土木事業部の兼務が解け、そして二年前、総務部を離れ現在の法務室に移ってからは仕事との直接の関連がなくなりましたので、当会に振りあてる時間は、アフターファイブと休日に限られるかなり窮屈なものになってしまいました。しかし、折からの企業市民論の台頭、メセナや企業人のフィランソロピー（ボランティア活動）を奨励する社会的風潮は、社内にも浸透しはじめ、社員の地域貢献・市民活動への理解が深まり、当会の活動に対しても有形無形の支援がなされるようになりました。

さて、当会は創立以来、毎月欠かさず、鶴見区公会堂などを拝借して例会を持ち、川づくりやまちづくりの議論を重ね、また、「実践」を重視してフィールドへ出ました。「知水」のため鶴見川を歩き、川や流域のイベント／祭りには積極的に参加し、機会をとらえて行政や地域社会に提言・提案してまいりました。

会員も現在百人を超え、川のシンクタンク（機能集団）として且つネットワーク・コミュニティ（共同体）として、着実に力が着いていくようでありました。どうやら、市民運動は焦らず、怒らず、が鉄則のようです。月例会も出席者十人前後という淋しい時期もありましたが、「継続は力なり」、あまり深刻にならずに続けて来

ました。そんな時、「どぶ川文化」や「遊び心」を掲げて、悠々とやっておられる「よこはま・かわを考える会」の存在から、多くを学びました。

こうして、コツコツやっている間に、うるおいの豊かな生活を求める声が大きくなり、また、地球環境問題がクローズアップしまして、河川行政もアミニティ志向へと急速転換をいたしました。「エコロジー&アミニティ」は当会の基本理念となり、地球環境擁護へのキーワード Sustainable Development（持続可能な開発／発展） Think Globally, Act Locally.（地球規模で考え、足元から行動を起こせ）は、私たちの行動指針となりました。

「川の再生と川からのまちづくり」という使う言葉も当初は中身が見えなかったのですが、そのイメージがこのところ急速に形をなしつつ彩りを増し、行政の「河川環境管理基本計画」や多自然型河川工法の研究等の姿となつていよいよ射程距離内に入ってきました。当会の進路もかなりハッキリ見えてきました。

### 三——方法論——それはネットワーク

アメリカの草の根市民連合の動きを紹介したリップナック・スタンプス夫妻の著書「ネット

ワーキング」や、わが国で書かれた「ネットワークキングへの招待」（金子郁容著中公新書一九六）などは、会社の組織開発担当の必読の書ですから、仕事の関連で読んでいました。当会の世話人を引受け、月例会の案内状まがいの会報を出すことにしたとき、これだな、と、直感して、そのタイトルを「鶴見川ネットワーク」と致しました。

会員一人一人が、何らかのプロであり、それぞれ固有の知識やスキル、サービスを提供して、当会の機能発揮に貢献してもらおう、と同時に、会員相互の交流の中から情報・知識・技術と友情を交換して自分の肥やしにもする。つまり、「自立した会員」が「主体的にネットワークキングする」、ホロニックな組織且つコミュニティでありたい、という思いを込めたつもりでした。当会は、ネットワークキングを方法論（実践）の根幹に据えた訳です。

ネットワークキングの手法は、いわば「この指とまれのコミュニティ創り」であります。これは私見ですが、これからの新しい市民活動は、出入り自由、ムラの締めつけをしない、そして小振りの目標を掲げる団体がいい、そんな市民集団が輩出して、テーマ毎にネットワークキング（交流・連携）する仕法で行われるのが望ましい、と考えております。

これからの社会が求める基本的な個々の価値や施策毎（例えば、都市河川の再生、資源リサイクル社会のシステムづくり、環境NGOの推進など）に、各地域で（これも既成の市町村と考える必要はなく、「鶴見川流域」でもいい訳です）その実現に向かって、「この指とまれ」で旗揚げをして、「テーマ・コミュニティ」を沢山創っていく、そして、その共同・連携の中から透明度の高いさわやかな世論形成を図ろうという考えです。

私たち、鶴見川を楽しくする会は、その目的を達成するには、川やまちを知ることのほかに、流域市民と行政にまたがる「鶴見川ファン」や「鶴見川人」の交流・仲間づくりに力をいれてきました。鶴見川の祭りやイベント、中でも建設省や横浜市主催の行事、例えば五月の京浜工事事務所「ふれあつて鶴見川」の「鶴見川ウォーク」や八月の鶴見区名物「いかだフェスティバル」などは、絶好のチャンスです。

いかだフェスティバルには、毎回アイデア部門に参加し、毎度のように入賞をはたし、結果にも満足していますが、紹介したいのは、いかだの考案・設計・制作・出漕のプロセスです。とくに、鶴見区の小学校の体育館を借りて毎年実施しています「親子で楽しむ、いかだ作りワークショップ」。リサイクル社会を意識して牛乳

空パックやアルミ空き缶を主な材料にして、大人と子供の共同で制作し、漕ぐのですが、他の市民団体とのネットワーキング、大人と子供の心の交流が実現して大変好評でした。

昨夏は、「鶴見川流域ネットワーキング・フェスティバル91・TRネット」という流域ネットワークワーキング（連合）・リレー川祭りを実施中でしたので、その一環として、「流域交流いかだ」で参加しました。帆柱には、鶴見川源流（町田市）の清流にすむホトケドジョウやアブラハヤ（アルミビール缶で作りました）が泳ぎ、参加団体代表の皆さん扮する「鶴見川七福神」と生き物が乗って漕ぐという趣向で臨み、少し派手にアピールしました（写真参照）。喝采をあげました。その夜の花火は殊の外きれいで、鶴見川の土手で乾杯したビールの味もまた格別でした。

#### 四——川の流れに沿って

##### —— ネットワーク・コミュニティ

「TRネット91」については、是非ふれておかなければなりません。きっかけは、例年一月に開かれる「よこはま・かわを考える会」主催の「縁・円・MIZの会」での鶴見川流域の川や自然の好きな人たちとの出会いです。一昨



鶴見区の河口にいたる鶴見川流域の河川・自然愛好団体は、昨年五月十二日の港北区樽町河川公園でのオープンニング・イベントをスタートに、今年六月のブラジルでの地球サミットの頃まで、毎月鶴見川流域のどこかで祭り／イベントを持ち、リレーしながら「流域地図を共有する」仲間の環を広げています（添付TRネット趣意書および鶴見川流域ネットワーキング宣言参照）。リレー川祭りを続けるうち、私たちは、川を横切る橋や鉄道の軸はスピード、効率、利便、

人工、理屈や物質文明が支配し、川の流れの方向に自然・伝統・文化・やすらぎ・アメニティ等これからの時代の価値物があることを発見して、「鶴見川流域人」を意識し始めました。中・下流域人も源流の鎮守の森やハヤの里、「春の小川」を残す意義がよくわかるようになって、応援団もでき、昨年は何度も町田市小山田の源流を訪ね、官民交流のシンポジウムで「自然保護と開発の両立」を議論し、市長も参加された野外交流会では「鶴見川水系流域の思想」で語り合うことができました。

一村一品運動は世界各地へ輸出(移植)され、国際交流の有力なツールとなりました。地域からの発想が普遍性、説得力を持ちえた好例ですね。国レベルの大味なODAだけでは、却って嫌われてしまう、NGOや地域直結の草の根の人間交流が伴わなければ、異文化の壁は超えられない、とよくいわれます。欧米や日本が追い求めた近代化路線・物質文明追求論理では、途上国や貧しい国の人々には通用しない、説得できないということです。地球環境問題や人口爆発問題など、地球規模の問題を克服できなければ、人類・地球の将来はありませんから、世界の人口の八割をしめるそれらの国や人々ともなんとかコミュニケーションを成立させなければなりません。どうしたら、コミュニケーション

のツールを持てるのでしょうか。かぎは、地球規模で考え、地域で行動を起こそう、ではないでしょうか。私たちTRネットのように、川の流れに沿って、流域の価値物、水と緑と土の自然や生活文化に目覚め、物質文明よりも心の文化の軸で発想する比重を高め、社会実験を積んで行けば、違いがわかる、違いを認める地球市民になれるのではないかと考えております。全国の川の流域で、川の浄化・再生運動とともに、元気なシルバーによる資源リサイクル社会(その収益金での国際交流、NGO活動)、エコ・ライフ・サークル、ミニ農園(ケライン・ガルテン)等自覚した市民による地域コミュニティやテーマ・コミュニティが生まれてほしいと願っています。

以上のような考えから、鶴見川の再生とさわやかな流域コミュニティ創り推進のため、今年五月十五日の「鶴見川総合治水の日」を期して、建設省と流域自治体首長それに市民代表による「鶴見川流域／官民交流サミット会議」を是非実現したいと存じます。

△草野＝鶴見川を楽しくする会世話人▽

## その2・源流から鶴見川ネットワークへ

### 一 東京・町田に源流の会

鶴見川は横浜市最大の河川です。しかし同様に、あるいはそれ以上に、東京・町田の川でもあります。横浜は市域の三三%が鶴見川水系ですが、町田は七〇%が鶴見川水系。しかも流域はそっくり町田市北部の多摩丘陵に広がっていて、町田は文字通り鶴見川源流都市だからです。私は現在、その最源流、東京都町田市小山田の小山田桜台という新興団地の住人で、△鶴見川源流自然の会▽、という地元市民団体の代表を務めています。我が会のモットーは持ち場主義。源流の自然にびったり付き添いながら、森や泉や清流を保全する工夫も進めています。さらに最近では、横浜市を中心とする流域の鶴見川ファンとも密接に連携し、△流域に鶴見川流域人のエコロジカルな流域文化を作ろう▽と、大きな志もたて始めているのです。

会の発足は一九八八年七月三日。流域の写真撮り歩いた私はその晩、知人や身内に励まされ、団地集会所でスライド会を開きました。鶴見区で鶴見川の流れを友達として育った私は、故あって八四年に鶴見から現在の団地に転居し、その後はひたすら地元を歩いて源流域の自然の



地図を心に刻み込みました。良く知っているつもりだった鶴見川ですが、最源流が町田・八王子・多摩三市の市域にあることも、その一帯にはまだアデラハヤやヤツメウナギの暮らす清流があり、水源の森にはキツネやオオムラサキが暮らすことなども、実は転居の前後に始めて知ったことです。ところが源流域の自然の賑わいが鮮明に見えて来ると、その危機もまたあからさまに見えて来ました。膨張を続ける多摩ニュータウンと相模原周辺市街地に囲まれた源流地域は、すでに緑の孤島の様相で、鉄道延伸を含む大規模な町づくりの計画が間近に迫っていることが分かってきたのでした。源流に付き添っていずれ市民活動を始めることになるのだろうか。谷戸歩きを始めたころから、私にはそんな予感がありました。

## 二——源流に付き添い、保全の可能性を探る

さいわいスライド会は盛況で、少数ながら活動に賛同してくれる友人もでき、△鶴見川源流自然の会△はめでたくスタートとなりました。その後、今日までの会の活動は、大きく見ると二つの分野に広がります。一つはとにかく源流に付き添うこと。大人や子どもが連れそって源流の谷戸をゆらゆら歩く。源流から二キロほど

下手の都立・小山田緑地で毎月定例の交換会を開催し、源流の泉の水でコーヒをいれる。源流の農園で草取りや収穫もする。源流Tシャツや小物を作り、源流グッズと称して団地祭、福祉のイベント、そして流域イベント等に参加する。もちろん、源流の泉や清流や、川の魚たちの世話もやぐ。マニアックな自然探趣味はやや希薄ですが、日常的な活動の合間に、会のナチュラリストたちが雑木林や河川の生物調査も進めます。あれやこれやでスタッフとその家族たちは、週末の大半を源流域で、あるいは源流の話題で過ごすようになりました。危機の源流の自然に付き添い、楽しみ、学んで、世話もやぐ。活動というより暮らしの形になりはじめているのかも知れません。見方を変えれば、スタッフ一同が、継続看護を必要とする△源流△という名の新しい親戚を認知してしまっただようなもの。景勝の地を訪ね歩くタイプの自然愛好とはまるで異なるナチュラリスト暮らしの始まりですが、そこにはある種の安らぎや楽しみが確実に育っていると思います。

もう一つの分野は保全を目指した活動で、こちらは△町田の自然を考える市民の会△と密接に連携します。八九年の暮れに設立された△市民の会△は、町田市域の自然保全に関して全体的・総合的な構想を掲げる仕事集団です。ただ

し当座の中心課題は鶴見川源流域に集中しており、広い分野で△源流の会△と連携します（代表も私が兼任しています）。連携活動の一例は、源流の泉保全運動でした。九〇年の初頭、土木工事のトラブルで最源流の泉が涸れ、アブラハヤを始めとする源流の生物が危機にさらされました。源流の会と市民の会は、連携してハヤの救出行動を行い、その後、行政との丁寧な交渉を経て泉の回復・保全に成功しています。さらに都立・小山田緑地の公園整備や、源流域の河川保全等に関しても具体的な提案を伴う活動が続いています。そして目下の最大の共同目標は、鶴見川源流自然公園構想。地権者や行政の理解で、鶴見川源流に、森と、泉と、ハヤの暮らす清流を豊かに保全し、二百三十五平方キロメートルの鶴見川流域文化圏の素敵な名所にしてほしいとアピールを続けています。

## 三——野外談話室から流域ネットワーク

毎月第二日曜日の午後、都立・小山田緑地で開かれる△町田の自然を考える市民の会△の定例会は、野外談話室と呼ばれています。地元から、市内から、そして流域の各地から源流ファンやナチュラリスト仲間が気軽に訪ねてくれる催しです。源流の谷を見下ろす丘の上に鶴見川

源流の泉の水の△源流コーヒー▽の香りが漂い、参加者は昼寝よし、草野球よし、団欒よし、ナチュラリストの案内で緑地の雑木林を散策するもよし。もちろん、各地の活動をネットワークする青空会議もOK。流域人たちが源流で、自然と流域仲間にあえる交流の空間です。その丘の上に、源流コーヒーの湯気を絶やさないと、源流の会のメンバーの重要なボランティア活動の一部です。そして実は、その野外談話室に象徴される交流を切っ掛けにして、源流の会、市民の会の活動は、源流域の地域活動から、鶴見川流域ネットワークの形成へ、飛躍的な展開を見せることになりました。

八九年秋、源流の会は、源流ウォーキングや野外談話室で知り合った流域仲間呼び掛け、流域市民団体とナチュラリストグループの情報交換のための鶴見川・ナチュラリストネットワークの結成を提案しました。源流の自然を守るためには単に町田市域だけでなく、横浜・川崎・町田の全流域百六十万人の市民に源流の意義を評価・応援してもらう必要があると私は考えました。さらに、行政の境界を越え、川の流れに沿ってエコロジカルな市民文化の交流が始まることは、地球環境問題の時代にふさわしい新しい町づくりの仕掛けにもなるはず、という見通しがありました。十二月九日、提案に沿って流

域ネットワークを目指す交流会を町田で開催しからは急展開。十二月二十二日、△鶴見川源流自然の会▽と△町田の自然を考える市民の会▽は、鶴見川の△鶴見川を楽しむ会▽、緑区の自然保護団体△緑区・自然を守る会▽と一緒に、△よこはま川を考える会▽から同時に横浜水辺賞を頂くこととなりました。そして新年、△鶴見川を楽しむ会▽から、官民共催を目指した△鶴見川ネットワークキングフェスティバル91・TRネット▽の企画が示され、源流の会は市民の会とともに、大歓迎で参加を決定したのでした。

△流域地図の共有▽をテーマに掲げたTRネットは、横浜・川崎・町田の十六の市民団体の連携でスタートし、九二年五月の鶴見川総合治水の日(5/12)から一年間、流域全域で開催される関連イベントを、ネットワークで繋ぎました。源流の会・市民の会は、定例の野外談話室や地元の地域イベント支援に加え、ふれあって鶴見川イベント参加(5/12)、源流野外交流室主催(6/9)、鶴見川源流シンポジウム主催(7/20)、鶴見区イカダフェスティバル参加(8/18)、そして暮れには源流最大のイベントとして、鶴見川源流祭(12/8)を町田市と共催で実行することができました。この一年はスタッフ一同、まるでイベント作業に転じたような暮らしです。しかし、おかげでTVや新聞報道も重ねて鶴

見川源流を取り上げてくれるようになり、水系地図の共有は、同時に源流の自然の豊かさや危機の発見を伴って進んでくれています。この間、換算すれば恐らく一千人をゆうに越す人々が源流を訪ねて下さいました。TRネットの活動をきっかけに、横浜市・港北区に△鶴見川中流応援団▽が結成され、中流・源流の交流も大きな流れになりました。持ち場主義を貫きつつの流域交流は、官民サミットも視野に入れ、すでに九二年度の準備を進めています。

#### 四——地図の共有から流域文化の形成へ

持ち場を大切にしながら流域交流を進める、というには、土曜・休日で活動する市民にとっては言うほどに簡単なことではありません。持ち場に付き切れば広域交流は難しい。広域交流に重点が移りすぎれば、会議の連続で、自然や地域との付き合いはどんどん形骸化してゆきます。継続看護の必要な源流の自然を抱えてしまった私達としては、グラスルーツを外れることなく、同時に流域(広域)交流を進めることのできる上手な工夫が必要でした。鶴見川上流端・小山田緑地で開催される野外談話室は、そんな工夫の一つです。午前中は源流の自然に付き添い、午後丘に登れば流域仲間に来て団欒もで

きる。流域から訪ねてくれたネットワーク仲間  
は、忙しければコーヒータムだけの交流、時  
間があれば朝から源流を歩くことも可能。毎月  
第二日曜日午後は、晴れば小山田緑地の見晴  
らし広場に必ず源流コーヒータムの湯気がのぼり、  
源流の会のスタッフががいる、という安心を、私  
達はこれからもずっと維持して行こうと思っ  
ています。

流域地図のわかり易い共有も、実は、持ち場  
主義と広域交流を共存させる工夫の一つと思っ  
ています。しかも、ありがたいことに、鶴見川  
の流域は、とても覚えやすい形をしています。  
△斜め後ろからみたバクの姿▽。たぶん無理な  
くそう見えるはず（図参照）。こうして二百三  
十五平方キロメートルの流域全体をいわば個体  
化することで、持ち場と流域の広がり、あるい  
は持ち場と流域の拠点との心理的な距離は、一  
気に縮まるはず。その心理的な親和感がとても  
大事なものだと思うのです。たとえば、鶴見・  
イカダフェスティバルの晩に源流の子どもたち

が見事な花火に感激した鶴見・佃野の川辺はバ  
クの右足真中あたり。総合治水イベント会場上  
手で早淵川と本流が分岐する港北区綱島はバク  
のおしり。新横浜から中流に広がる河川敷の緑  
は右足の付け根。写真集の出版で注目を集めた  
恩田川支流の梅田川・新治の素敵な谷戸は、や  
や寸づまりの左前足あたり。鶴見川源流都市町  
田の玄関・町田駅は、頸筋から境川水系にぶら  
下がる草の種。そして源流・小山田はもちろん  
バクの鼻の先です。こんな具合に拠点をバクの  
図柄におとしに行き、それぞれの地域でボラン  
ティア活動を続ける流域仲間を思い浮かべると、  
宴会は半分で連帯は二倍、というような不思議  
な心の転換がある（？）、と思うのです。流域  
地図を共有したら、みんな鶴見川流域人。その  
流域人たちが、自然を大切に、持ち場を大切  
にする市民活動を支えながら行政区分を越えて  
交流を進めて行けば、バクの形の鶴見川流域に、  
なにやら緑色の△流域文化▽が春のあしかびの  
ごとくぐんぐん成長しはじめて、やがて都市の

構造も地域の文化も、穏やかに、しかし確実に  
エコロジカルな転回を上げてゆく。私は、そん  
なロジックを信じることにしています。

さて、バクの鼻の町田市・小山田緑地は、町  
田駅からバス三十分、淵野辺駅からタクシー十  
分。毎月第二日曜日午後は、その緑地公園の丘  
のてっぺんに、晴ればかならず野外談話室・  
源流コーヒータムの席があります。そこから徒歩十  
五分のバクの鼻先には、保全のかなった田中谷  
戸源流の泉があり、毎日千五百トン近い清浄水  
を吹き出してアブラハヤの暮らす清流千メート  
ルを守り続けています。泉の脇には、△鶴見川  
源流の泉▽の見事な看板。リサイクル品でその  
看板を作ったのは、もちろん鶴見川源流自然の  
会のスタッフたち。日曜日、そこで泉の世話を  
やく一団がいれば、源流の会、あるいは市民の  
会のスタッフかもしれません。

△岸Ⅱ鶴見川源流自然の会代表▽

### 3. 「鶴見川ネットワーク・フェスティバル'91」の開催

言うは易く、実行となると大変なむずかしさがあると思います。一番大切なことは、流域住民のどれだけの心に鶴見川の活性化に関心をもってもらえるかです。そのことを念頭に、私達は全流域をつなぐ市民手作りの川祭り「鶴見川ネットワーク・フェスティバル'91」（略称：鶴見川ネット'91）の企画をすすめてきました。そして、その準備のメイン・タスクの一つとして上記「鶴見川水系河川環境管理基本計画」の具体化研究・アイデア提案を各流域でやって、その成果を「鶴見川ネットワーク市民会議」に持込もうと考えています。また、フェスティバルを線香花火に終わらせないように、来年6月に予定される国連環境開発会議の「人間環境宣言」20周年の頃までの約1年間、鶴見川で花を植え、風流を競い、自然を楽しみ、伝統芸能を発見し、歴史を訪ね、各流域の産物を賞味し、そして、たっぷり歩き・走る「鶴見川ネット'91」を冠したイベントや祭りをリレー式に実施してみたいと意欲的です。

準備の時間は、大してありませんが、5月12日の河川管理者による「ふれあって鶴見川'91」との連携で実施するフェスティバルをはじめ一連の祭りや行事を楽しくかつ独創的に挙げるため、各流域の住民・団体（企業）と河川管理者・自治体が知恵とエネルギーを結集して企画・準備に取り組みたいと存じます。

本鶴見川ネット'91の総合企画・計画・調整・運営ならびにそれらの実施に伴うPRや財務活動を効果的に実施する機関として、呼び掛け人（団体）ほかに奉仕活動を期待して「鶴見川ネットワーク・フェスティバル'91実行委員会」を組織いたします。

なお、本フェスティバルの現段階での企画概要につきましては、添付の企画書をご参照願います。

○以上の趣旨に御賛同賜り、鶴見川に関心を寄せられる、ひとりでも多くの方や団体の自主的なご参加を期待して「鶴見川ネット'91」の開催を呼び掛ける次第です。

平成3年2月27日

〔3/27より実行委員会へ移行- ●印世話人他で編成〕

鶴見川ネットワーク・フェスティバル'91呼び掛け人会（準備会）

（略称：鶴見川ネット'91=NET:Networking Events for TSURUMIRIVER）

（源流から）●岸 由二・鶴見川源流自然の会（町田市）

●町田の自然を考える市民の会

○種田為博・町田の水を考える会（町田市）

○北川淑子・緑区・自然を守る会（緑区）

●中村淑子・緑区・川を楽しむ会（緑区）

○後藤好正・神奈川自然保全研究会（港北区）

○平山静男・川崎市歩け歩け協会（川崎市）

●岡田 実・オルタナティブ川崎研究会（川崎市）

○新田弘子・みどりの会（鶴見区）

○一柳保雄・市場地区自治会連合会（鶴見区）

●草野重芳・鶴見川を楽しむ会（鶴見区）

○久保田正男・鶴見川子供発見団（横浜市）

○佐藤忠男・よこはま歩け歩け協会（横浜市）

○森 清和・よこはま川を考える会（横浜市）

●大澤浩一・鶴見川を楽しむ会（港北区）

注) 2月27日の準備会で、  
1. 上記趣意書と添付企画書を暫定的なものとして採択し、3月27日移行した実行委員会を確認した。  
2. 右の呼び掛け人の内から本部実行委員として5名の世話人(●)を選出し各世話人の不在時代行者と若干名の顧問・アドバイザーの委嘱を決めた。

### ●鶴見川流域ネットワーク宣言案●

さつき風薫る今日、総合治水のイベント「ふれあって鶴見川'91」にあわせて、私たちは鶴見川の全域で流域市民の川まつり「鶴見川ネットワーク・フェスティバル'91」を開始しました。新緑の源流では朝から源流コーヒーの湯気があがり、上手にスカンボの吠く中流では賑やかな観察会が開かれました。小ハゼの群れ始めた河口あたりから遥か上流まで川迎を辿る人々もたくさんいたことでしょう。鶴見川流域総合治水対策協議会主催の総合治水イベント「ふれあって鶴見川'91」のメイン会場となった、ここ横浜市神奈川の河川敷にも、早朝から幹な水系市民たちが集い、出店や、綱引きや、たこあげや、そしてカヌーイングをはじめとする各種の催しを楽しみ、交流とアピールの一日を過ごしました。鶴見川ファンの流域市民ネットワークが神奈川・東京の行政区画さえ越えて文字どおり全流域に広がるのは鶴見川開闢以来はじめてのことと、埴野河川敷アシ原のベケイガニたちは言っています。

水系全体が都市域に囲まれた典型的な都市河川・鶴見川は、いまなお自然破壊と、洪水の危機、そして激しい汚染の歴史の中にあります。しかし、総合治水対策の推進や、河川環境管理基本計画の策定で、保全・再生への転機も見えてきました。治水機能一辺倒から親水水、生態系をも考慮した総合的な河川行政への移行や、川辺親水を積極的に活かしたまちづくりは、もはや時代の潮流です。流域市民が再び川への関心を回復し、バクの形をした鶴見川水系の姿が流域160万人の心々に鮮明になれば、水系の自然破壊にも歯止めがかかり、水辺の再生創造にも弾みがつく。私たちはすでにそんな時代が始まっていると感じています。

今日スタートしたのは、鶴見川で遊び、鶴見川で学び、さらに水系の世話をやきながらネットワークの輪をひろげようという運動です。流域各地が交流をかきあわさるうちに、例えば源流の市民の心に河口の町が、河口の町の市民の心に源流の森や泉が住み着くようになる、矢本川の光景が恩田川の市民に、恩田川の光景が早淵川の市民に鮮明に見えるようになるでしょう。私たちは確実に鶴見川水系の地図を共有しはじめ、それが未来への恐らく一番やさしい共通の力になるような気がします。地図の共有は文化の共有に、文化の共有は志の共鳴にいたるものなのでしょう。もし未来から振り返ることが今できるなら、川にやさしい自然にやさしい新しい流域文化圏を鶴見川流域に育てていこうという大きな志を、私たちが今日ここからはじめたことが見えるかもしれません。

国連人間環境会議20周年の1992年春まで、鶴見川流域は地球的に考え、地域で活動するネットワーク者たちの様々な行事で、河口から源流まで賑わう、この年、235平方キロメートルの水系に暮らす人々と生きものが幸いで、ネットワークづくりが楽しく快調である事を祈り、そしてもちろん流域各地で今日の催しを支えた流域仲間の労をねぎらって、静かな拍手、ということにしたいと思います。

1991. 5. 12

鶴見川流域ネットワーク（TRネット）/流域市民会議参加者一同

鶴見川をいきいきさせる ― 全流域交流・リレー川祭り:  
「鶴見川ネットワークワーキング・フェスティバル  
91」 ―― 趣意書 ――

1991.3.27 (実行委員会確認)

○はじめに ― 鶴見川全流域をつなぐ川祭りを!

私達は、本年5月、鶴見川の「総合治水の日」(5月15日)直前の日曜日(12日)に、鶴見川の再生と新しい川の創造をめざして、町田市の源流から横浜市鶴見区の河口にいたる全流域沿川の住民・行政・企業三位一体での川祭り『鶴見川ネットワークワーキング・フェスティバル'91』をスタートすべく準備を始めました。

単に一日だけのお祭りというのではなく、鶴見川を安全でさわやかな快適空間・アメニティ資源として活用するため、人の環・知恵の輪を広げつつ、鶴見川がご縁の「地球・環境にやさしい」ライフ・スタイルやまちづくりを考え、実践する運動の出発点ともしたい、と願い、5月12日、建設省のイベント「ふれあって鶴見川'91」と相呼応して開催するフェスティバルを事始めとして標記の名称を冠した川祭り・イベントを毎月継続して試行することを考えています。

5月12日のフェスティバル当日には、各流域の独創的な祭りの行事とともに「鶴見川流域ネットワークワーキング市民会議」を予定しておりますので、積極的なご参加ご支援をお願い申し上げます。

また、この交流川祭りの一環として、近い将来、機が熟するのを捉えて、鶴見川活性化にとって重要な意味をもつ「流域自治体首長による ― 川を活かしたまちづくりサミット会議」が実現するよう関係方面に働きかけてまいります。

なお、私達が鶴見川フェスティバルの開催を呼び掛ける動機は以下のような考えと状況認識に拠っています。

1. さわやかな川の再生と創造 ― 今やらねば・今ならできる

自然がいっぱいあって、水がきれいだった昔は、鶴見川でも泳いだり魚をとって川と一日遊んだものです。釣った魚は夕食の食卓に上り、家族団欒のタネになりました。今の子供たちには、水泳といえばプールだし、汚い・危ない川は近づいたり、遊んだりする所ではなくなってしまいました。真っ黒いへドロの川底を見せ、メタンガスを発生し、ごみの捨場となり、殺風景なコンクリート護岸の排水路・放水路と化している現代の都市河川を好きになろう、愛護しようと呼び掛けるには相当なムリがあります。

しかし、本当の川の恵み・川の楽しさを知る者は、産業・経済活動の高度化と都市化の波の犠牲となったこうした都市の河川を気の毒に思い、すまないと思い、昔のキラキラと元気な川、景色のいい川に戻してやりたいと思ってきました。さらに、これから21世紀に向かう時代に、高齢化社会や人と車のきわどい共生社会の姿を思い描いてみると、川にはもっと晴れがましい都市のオアシス・安心地帯としての役割を― 身近にある河川公園・釣り場・遊歩道・スポーツ広場・コミュニティ広場・ミニ農園等々として ― 担ってほしいと期待が膨らむのです。この川のルネッサンスと創造に賭けるロマンに満ちた仕事は、経済成長の追求のみに忙しく、乾いてしまった日本人の心に向けるおいを取り戻すためにも、金と技術の裏付けもできた今こそやらねば、今ならできると思えてきます。

そうです、みんなで鶴見川から始めようではありませんか。

2. 鶴見川活性化は住民参加で

鶴見川は、全国の一級河川の中で沿川の都市化が最も進んだ川です。緑や自然が最も人工に蚕食された川とも言えます。その結果として、毎年行われる水質汚濁度調査では、このところずっとワースト5の常連を続けていますが、その汚れの原因の75%は家庭の台所や風呂からの雑排水に因るといわれています。またその都市化・開発のスピードが速く、水を蓄える緑や土が急速に減退して水害の危険が増大したため、河道の浚渫とともに護岸の強化方法としてコンクリート化が推進され、そのため川の姿も無愛想な放水路のような川になっています。

さて、川の役割には、おおまかに言って、治水・利水・親水(環境)の三つがありますが、基本になる治水にしても沿川住民の参加・協力が不可欠となって、都市の川には「総合治水」の思想が生まれました。鶴見川の水質問題も、合併浄化槽の普及や下水の高度処理に期待が持たれますが、同時に沿川住民の鶴見川へのやさしい心遣い、家庭や企業による排水の汚れを減らす協力なしには解決されそうにありません。

こうした住民参加の総合治水の思想は、河川の親水機能、快適環境としての活用にも浸透し、昨平成2年3月には、「鶴見川水系河川環境管理基本計画 ― 流域と調和し都市を潤すふれあいの川「鶴見川」 ―」が、建設省・東京都・神奈川県で策定されています。これは、流域毎の河川空間の活用の基本構想ですが、これに魂をいれる今後の具体化段階は流域住民の知恵と熱意にかかっています。

私達・鶴見川ファン(団体)は、こうした鶴見川をめぐる「状況」を見ながら、これまで数年かけて交流し、源流から河口にいたるネットワークをつくり、鶴見川全流域をつなぐ川祭りの可能性を検討してまいりました。

地球環境問題がようやく広く知られるようになり、“Think Globally Act Locally.”といわれます。私達は、鶴見川の再生と創造という具体的テーマを追いかけの中で地球市民的視点から「環境にやさしい」エコ・ライフを考え、実践する運動を提唱し、その出発点として鶴見川全流域の川祭り・フェスティバルを位置づけたのです。

